

# 山形大学附属博物館報 34

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2008. 3

## 目 次

デワーナちゃん祝30歳 .....	丸山俊明 (1)
幕末期(～明治初)の俳人蒼山(乙牙)のこと .....	島崎利博 (2)
資料紹介—菊池華秋《桜に鷹》— .....	(3)
初めてづくしの特別展 Information Desk .....	(5)
平成19年度事業報告 .....	(6)

## デワーナちゃん祝30歳

丸山俊明(附属博物館館長)

山形県の天然記念物に山形大海牛という生き物がある。生き物といっても大昔に山形盆地を泳いでいたジュゴン(漢字だと儒艮と書く)の仲間の化石である。何も知らずに字面だけ見ると「山形大学でウミウシかアメフラシを飼っているのですか?」と勘違いする方もおられるが、読みがなを振るとヤマガタダイカイギュウとなり、このカタカナ名が和名となっている。わが国では動植物・岩石鉱物名をカタカナで表記する慣習のため、小学校以来、国語の教科書に桜・朝顔・菊と印刷されていても、理科の教科書や百科事典にはサクラ・アサガオ・キクと印字されるのだ。このカイギュウは、化石から体長4m弱、胴回り3m半でアマモやコンブなどを食べていたと推定され、今から約1000万年前、山形盆地全体が海草の豊かに繁る浅い海だった頃に、家族単位で子育てをしていたようすが復元されている。

生物の分類学の世界では、分類階級のまとまりの大きな方から順に界門綱目科属種と定められており、海牛は動物界、脊椎動物門、哺乳綱となり、われわれヒトと同じく母乳で子育てをする仲間である。海の波間で子供を抱きかかえるようにして授乳している姿から人魚伝説のモデルになった動物だといわれている。さらに海牛目、ジュゴン科、ドシシーレン属と分類され、種はデワーナとなる。学名として表記する際には属名と種(小)名の2語を並べて *Dusisiren dewana* とイタリック体にする

決まりになっており、私はこの種小名デワーナに親しみを込めてデワーナちゃんと呼んでいる。デワーナの語源は「出羽」であり、この学名はドシシーレン属のうち出羽の国で産したものであるという意味をもつ。「わたくし、生まれも育ちも東京は葛飾、柴又です。帝釈天で産湯をつかい、姓は車、名は寅次郎。人呼んでフーテンの寅と発します。」になぞらえば、「わたくし、生まれも育ちも日本は東北、出羽です。山形盆地で産湯をつかい、属はドシシーレン、種はデワーナ。人呼んでヤマガタダイカイギュウのデワーナちゃんと発します。」となるわけだ。

デワーナちゃんは今年で発見から30歳になるが、学名がついてからはまだ22年にしかならない。昭和53(1978)年、左沢小学校の6年生二人が2学期の始業式の日(8月25日)に「最上川の河原に動物の骨が埋まっている」と先生に報告したことから発見の物語は始まる。急遽、県立博物館によって発掘作業が行われ、骨の埋まったまま岩盤が掘り出されたのが8月30日のことであった。だから、あえてデワーナちゃんの誕生日を決めるとすればこの日が適当であろう。それから半年にわたって骨をきれいに削り出す作業を慎重に進めた結果、クジラだと予想していた骨が実は海牛だとわかったのは昭和54(1979)年4月である。アメリカのドムニング博士から届いた手紙によって海牛の大きな化石だから「大海牛」と呼ぶことになったが、このときはまだ名前はつけられていなかった。

ドムニング博士の来日をきっかけに昭和57(1982)年8月7日にヤマガタダイカイギュウという和名

が山形県立博物館から発表になった時には、すでに発見から4年が過ぎていた。ヒトの赤ちゃんならばたいい御七夜までには名前が決まるのだから、いぶん悠長に思えるが、それだけ県内初の大発見で学術的に手間暇がかかったということである。結局、学名の *D. dewana* が論文で正式に提唱されたのは、発見から8年を経た昭和61(1986)年のことであった。同年の5月に大江町では愛称を募集し、百点を越す応募の中から「ブクちゃん」に決まり、肉付けされた復元模型は現在でも大江町を代表するキャラクターとして愛されている。分類学的には種としての愛称がデワーナちゃん、化石標本の個体そのもののニックネームがブクちゃんだということだ。*D. dewana* は今のところ1頭(匹?)しか見つかっていないので、もし次の発見があればまた新たな地元のニックネーム(ブクちゃん2号に相当する名前)がつけられるだろう。

ここ数年、エリアキャンパスもがみの発足やインフォメーションセンターの充実にとまって学内の人の流れが変わってきた。小白川キャンパスが小学校の遠足コースに組み入れられ、初夏の社会科見学の一環として講義見学や実験授業体験が行われており、当然、図書館や博物館も見学コースのメインとしてかわいいお客さんたちをお招きしている。となれば、博物館ならではのお土産を用意したくなる。デワーナちゃんのキャラクターグッズとしてストラップ・マグカップ・下敷き・Tシャツ・キャップ等があればよい記念の品となり、天然記念物ヤマガタダイカイギュウをより身近に感じてもらえるだろう。県を代表する科学的なお土産候補としてデワーナちゃんを強く推薦したい。

館長として、文字通り「隣の芝生は青い」博物館がある。それは、ひとつの化石の発見発掘から大変身を遂げた福井県立恐竜博物館である。昭和63(1988)年に普通の県立博物館が手がけた肉食恐竜の歯の発見が、あれよあれよという間に平成12(2000)年の全国初の恐竜博物館の設置開館につながったのだ。日本に恐竜専門の博物館ができればよいなどは誰一人思いもよらなかった20世紀最後のミラクルヒットであった。まことに羨ましい限りであるが、残念ながら地質の関係で山形県内から恐竜化石が発掘される確率は限りなくゼロに近い。だからこ

そよけい、デワーナちゃんをもっと大切にしてい県  
の Mascot として活躍させたいと願うのである。  
デワーナちゃん、30歳おめでとう。

## ようこそ山形へ



### デワーナちゃんと呼んでね

筆者が授業で使っているスライド2点です。  
デワーナちゃんの復元模型、山形県立博物館(2000)  
の特別展冊子より作成。

### 学名 *Dusisiren dewana*



### 骨格

和名 ヤマガタダイカイギュウ  
山形大海牛

デワーナちゃんの全身骨格、日本古生物学会の英文誌に高橋ほか(1986)が新種として記載した際の論文より作成。

### 幕末期(～明治初)の俳人 蒼山(乙牙)のこと

鳥崎利博(本学OB)

山形県内の江戸期の俳人は沢山いるが、県外でしかも全国的に活躍した人は少ない。初期の清風、後期の一具は有名だがここで取りあげる幕末期の人物はあまり知られていない。ご存知の方もいらっしゃると思うが、その人の名は“蒼山”(はじめ乙牙のち蒼山とあらためる)。“摩訶庵蒼山”と号した。

姓は長嶋氏〔遠藤氏とするものもあるが別人〕。通称慎七。



以下若干の紙面をいただいてその人となりを紹介してみたい。

蒼山は、文政2(1819)年出羽国置賜郡赤湯村〔現在の南陽市赤湯〕に生まれ、何らかの事情で出家したらしい。(簡単にいうとお坊さんになった)

俳諧は地元で学んだと考えられるが誰に師事したかは不明。

乙牙という号からして白石の俳人乙二につらなる人に学んだか。

長ずるに及んで江戸にのほり越後出身の風外(史千又は蓬窓ともいう)に師事した。

その師風外が亡くなると晩年の弟子でありながら弘化4(1847)年師風外の追善集『ゆくとし集』の編纂にあたる。一具〔現在の村山市楯岡出身、当時の俳諧の権威〕は、その跋文のなかで「乙牙法師は、はしたかの出羽の国おいための縣赤湯の里の者なり」とあるのが初見。

そのあと京都にうつり名を“蒼山”とあらため当時の俳壇の長老梅室のもとに身を寄せる。

この梅室のもとでもめきめき力をつけ、編纂したのが『題英発句集』(4冊 嘉永5(1852)年)といわれている。(表向きの編者は梅室)

同時にこの年自分で初めての俳諧集『なにをたね』も出版している。

その後、嘉永6(1853)年には梅室も亡くなり1人立ちしていく。もちろん梅室の追善集『かれきく集』にも蒼山の名はみえる。

著作としては

- 安政2(1855)年 『雲鳥日記』  
(春湖と共同の紀行文 名古屋出發～四国、九州まで)
- 安政5(1858)年 『露の茎』
- 万延元(1860)年 『枯木集』(契史との両吟集)

と続く

文久2(1862)年には、京都四条に自分の庵「摩訶庵」を結び、当時春湖、為山と並び俳諧の三大家といわれた由。

翌文久3(1863)年には、庵を遠州見付〔現在の静岡県磐田市〕に移した。

これは遠州見付の俳人、尺樹庵烏谷が、わが亡きあとは蒼山に従えと遺言して没したことによるものと伝わる。(本音は幕末騒乱の京都を避けたか)

この遠州で、蒼山はまた別の顔をみせる。それは治水の技術者としての顔である。

山形(赤湯)で身につけたものか、全国行脚で修得したものか不明だが、治水に関する知識が豊富だったことから、同国長上郡安間村〔現在の浜松市〕の豪農金原明善と昵懇の間柄になり、蒼山は明善の天竜川治水事業に協力したと伝えられる。

この時期の俳諧の編著書としては、

- 文久2(1862)年 『遊糸録』
- 慶応元(1865)年 『ひくまのにき(引馬野日記)』
- 慶応元(1865)年 『越の雪』

などがある。

そして惜しまれつつ明治2(1869)年正月19日没  
年齢 五十有一

これが彼の一生であるが蒼山追福(追善)の俳諧集としては明治4(1871)年契史が序文を書いた『天竜しふ(天竜集)』があり更に明治5(1872)年には、春湖が『蒼山発句集』を出版、この中で「摩訶庵は、羽前赤湯の里にして…」とある。

没後9年を経て明治11(1878)年には、ともに天竜川の治水にあたった金原明善が蒼山追善の俳諧集『白露集』を編んでいる。

以上本県が生んだ幕末の俳人蒼山の概要である。赤湯―江戸―(加古川)―京都―遠州見付とその活動の広がりがおもしろい人物といえるが研究は殆ど進んでいないように思われる。

(※加古川にもいたらしい)

地元では『西川町史資料15』〔工藤三九郎家俳諧資料目録〕、『南陽市史 中巻 近世』ぐらいか。

筆者も資料収集につとめているが是非山形大学附属博物館でも史料(資料)収集にあたられんことを期待する。

## 資料紹介

### 菊池華秋《桜に鷹》

満開の桜の木の枝に鷹が一羽とまっている。やや横長の画面の中で鷹は左側面観で描かれており、

われわれからは見えない画面の外をじっとみつめているようである。画面を水平に横切る桜の枝は濃淡鮮やかに、鷹は濡れたような色彩で丁寧に描かれている。今回ご紹介するのは、大江町左沢出身の日本画家、菊池華秋による掛軸《桜に鷹》である。



絹本彩色 44.0×51.5 cm

華秋は明治21(1888)年5月25日、染物屋を営んでいた菊池長三郎、志ゆんの4男として生まれた。本名は啓三郎という。幼い頃から絵を描くことが好きで、生来身体が丈夫ではなかったことから得意な絵の道に進むこととなった。明治38(1905)年、遠縁にあたる山形市の黒木華郷に師事し、住み込みで絵の手ほどきを受ける。華秋の「華」の字はこの師からもらったものだ。明治40(1907)年、19歳の華秋は次兄政五郎に伴われて上京し、同じく遠縁の彫刻家・新海竹太郎の紹介で川合玉堂の門下となる。川合玉堂といえば当時34歳、同年から開催されることとなった文展(文部省美術展覧会)で審査員となり、横山大観、菱田春草、下村観山そして寺崎廣業といった面々と並ぶ中央画壇の大家であった。なぜ華秋が玉堂の長流画塾を選んだのか。そこにはこんなエピソードがある。明治39(1906)年、左沢の最上川畔にあった百目木の茶屋に日本画家の荒木十畝が短期滞在していた。政五郎に連れられた華秋がそれまで描いた画を見てもらったところ、この描き方なら川合玉堂氏に入門すれば画家として立つことが出来る、と言われた。この一言が若き華秋の心をとらえたのであろう。この頃の玉堂門下には山内多門、長野草風、平田松堂、村上鳳湖、今中素友といった文展で活躍する人々が集い、活気に満ち溢れた華々しい時期で

あった。

長流画塾は玉堂を慕う多くの画家が出入りすることから、比較的自由に各々の長所を伸ばすことができたのだろう。華秋は同年入門の池田輝方・蕉園夫妻からその画題と画風において多くの影響を受けている。池田夫妻は浮世絵の流れをくむ水野年方門下で研鑽を積んでおり、鏑木清方とも同じ流れをくむ美人画家として既に名声を得ていた。大正3(1914)年、第8回文展に出品した《もみじ》が初入選。以降、大正から昭和の初めまで数多くの華秋美人画が文展・帝展(帝国美術院展)で評価を集める。大正7(1918)年には長流画塾同門の井上花仙(芳子)と結婚。昭和4(1929)年、大作《伝説星月夜》が第10回帝展で特選を受賞。昭和7(1932)年には、自身の画塾である玉弓画塾をたてた。この名称の「玉」は師である玉堂から、「弓」は故郷最上川の曲がりくねった流れから付けられた。このようにふるさととの繋がりを大切にしていた華秋は兄の子供たちが上京して勉学する際、自宅に住まわせて面倒をみたり、寒河江市出身で夭逝した彫刻家、川崎繁夫を大層可愛がっていたという。太平洋末期には戦火を避けて先述の百目木茶屋に疎開する。そこで病を得、昭和21(1946)年6月9日その生涯を閉じた。満58歳であった。

この作品は華秋の画業において後期のものと思われる。昭和9(1934)年を最後に華秋は官展への出品を控える。それは芳しくない体調を考慮してのことでもあったが、おそらくはこれ以降厳しさを増す文化統制下の美術界の混乱に、画家として思うところがあったからだろう。この時期は花鳥画を題材とした小品がよく残っており、右下の落款も昭和年間の作品に多く使われたものと同じである。

「桜に鷹」というと葛飾北斎の同主題作品を思い出す方も多いただろう。鷹は古くから鷹狩のために武家の間で多く飼われていたので、庶民にも馴染み深い鳥であった。満開の桜と共に描かれることにより、より縁起の良い画題となっている。鷹の鋭い眼光、強靱な体躯、画面全体の力強い印象が北斎作品だとすれば、思慮深い様子の鷹、丹念に仕上げられた色彩、そして余白を意識した画面構成、落ち着いた趣が華秋のものである。また、西洋の写実的な自然描写から多くを吸収した玉堂の



弟子らしく、桜の細密な描写は手堅いものがある。実際、生前の華秋は花鳥描写なら誰にも負けないという気持ちがあったようだ。

昭和の初めに開業した料亭、目黒雅叙園はその絢爛豪華さから映画『千と千尋の神隠し』の湯屋のモデルになったことでも有名だが、玉堂門下を含む多くの画家・彫刻家が装飾建築に携わったことでも知られている。現在では百段階段の天井や最も華やかな「漁礁の間」にて華秋の作品を見ることが出来る。ゆかりの人々の元に残るほか、県内では山形美術館が作品を数点所蔵しており、そのうち《弁天の井》は大正9(1920)年下萌会展に出品された初期の傑作である。このように各地に残る華秋作品だが、山形大学附属博物館ではこの作品の他、《美人》という作品の2点を観ることが出来る。

#### 参考文献

- ・ 菊地吾郎 編集・発行『菊池華秋一人と画業一』1995年
- ・ 菊地真一郎 編『左沢菊池家の記録』善本社、昭和51年
- ・ 杉沼永一「山形県の人(22) 日本画家・菊池華秋—左沢菊池写真館出身の芸術家(1)」、『地域社会研究』第29号、山形地域社会研究読書会、2004年、129-154頁。
- ・ 天童市美術館、致道博物館、山形美術館 編集・発行『院展にみる山形の美術100年』1998年

\* この作品は2008年4月末まで中央図書館1階にて展示中です。この機会に是非ご覧下さい。

(附属博物館 森谷菜穂子)

## 初めてづくしの特別展

### Information Desk

昭和51年、本館で常設展のほかに特別展を開催するようになってから30年余。試行錯誤を重ねつつ、10日間程度の日程で平均400人ほどの見学者を迎え定着していたが、今年度の特別展は初めてづくしとなった。

まず、これまでの特別展の長い歴史の中、学外が会場となるのは初めてであった。次に、これまでは自前の所蔵資料だけで企画してきたが、他館(千葉県立中央博物館)そして個人(五百澤氏)から資料を借用して開催、というのも初めてであり、他施設との共同での事業というのも初めてであっ

た。こうして、今年度の特別展は、準備のすべてに蓄積する経験もないまま、ゼロからの挑戦と相成った。

平成19年度特別展  
山形大学が読み解く五百澤智也の世界 Part 1  
山に学び山を描く  
日本アルプス・ヒマラヤを中心に

期間 平成19年12月1日(土)～12月23日(日)  
会場 文翔館ギャラリー5～8  
主催 山形大学附属博物館  
(財)山形県生涯学習文化財団  
協力 千葉県立中央博物館  
内容 山形が生んだ山岳地形学者・鳥瞰図作家  
五百澤氏の作品を地元初公開  
—科学の目で空から山岳景観を描く—

上記の特別展概要のほか、特筆すべき事項として、11月30日に「教養教育課外講座」の講師として五百澤氏に講演を依頼、223人もの学内外からの聴衆を集めたこと。また、文翔館議場ホールで特別展期間中に開催した「特別展記念シンポジウム」にあたっては、会場のレコードとなる230人の参加者を記録したことが挙げられる。

この特別展が企画された経緯については誌面の関係上省略させていただくが、本館の歴史に残る特別展であり、今後の特別展の方向性をも示唆するものとなったことは明らかである。

大学附属博物館としての使命を「開かれた大学への貢献」「地域文化の向上に寄与」など、文字にすることは容易であるが、それらを実践していくことは難しい。人手や場所の制約もあり、正直、挑戦というより冒険に等しいと考えていた。他施設から資料を借用せずとも特別展を企画できた本館の所蔵資料の層の厚さにも甘えていたのかもしれない。

本来、特別展・企画展は様々な人との関わりと協力があってこそ成り立つものである。学外へ飛び出す機会を与えていただき、多くの方々に助けていただいたことは大変幸運であった。

最後に、期間中の総見学者数が4,200人という人

数を記録したことも「初めてづくし」のひとつであったことを記して終わりにしたい。

(附属博物館 高橋加津美)

特別展、シンポジウムの様子は博物館ホームページ (<http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/tokuten.html>) をご覧下さい。

## 平成19年度事業報告

平成19年度に本館で実施した博物館実習の単位習得者数は下記のとおり。

(単位：人)

学 部	人 数
人 文 学 部	25
地 域 教 育 文 化 学 部	12
理 学 部	27
他 学 部	0
計	64

公開講座は「山形美術館の傑作たち Part 2」と題し、昨年度に引き続き山形美術館を会場に開講された。定員(50名)を超える58名の受講者からは、早くも Part 3 開講を望む声が多く寄せられ、好評のうちに閉講式を迎える事ができた。講師・演題は下記のとおり。

<b>第1回</b>	11月17日(土)	1コマ 各100分
・故郷の最上川を描く(小松均) 山形美術館 館長 加藤千明		
・ミロの風景画～詩魂の画家の誕生 (ジョアン・ミロ) 東北芸術工科大学 准教授 安發和彰		
<b>第2回</b>	11月24日(土)	1コマ 各100分
・蕪村の内なる芭蕉(与謝蕪村) 山形大学 教授 山本陽史		
・冬のゴッホ(フィンセント・ファン・ゴッホ) 山形大学 教授 元木幸一		

<b>第3回</b>	12月1日(土)	1コマ 各100分
・マネ《イザベル・ルモニエの肖像》について (エドゥアール・マネ) 山形大学 准教授 阿部成樹		
・近代絵画、萬(よろず)、引き受けます - 萬鉄五郎《かなきり声の風景》について 山形大学 准教授 小林俊介		

特別展は、平成19年12月1日から23日まで(月曜を除く)、文翔館を会場に「山形大学が読み解く五百澤智也の世界 Part 1 - 山に学び山を描く」と題し開催された。(詳細は Information Desk で)

博物館で実施した今年度の事業については、博物館のホームページで随時お知らせしています。

### 平成18年度見学者総数

一般成人	個人	460人
	団体	139
大学生	個人	1,350
	団体	392
児童・生徒	個人	12
	団体	383
合計	個人	1,822
	団体	914
	総数	2,736

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。  
お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報 No34 2008.3発行  
 編集兼発行人 山形大学附属博物館  
 〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12  
 (TEL) 023(628)4930(直通)  
 (FAX) 023(628)4930  
 URL <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/>  
 E-MAIL [hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp](mailto:hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp)